

日本天文学会昭和 56 年度秋季年会記事

昭和 56 年度秋季年会は京都市内の京大会館に於て、A B の 2 会場で 10 月 13 日 (火)~15 日 (木) の 3 日間 にわたって開催された。講演数は会場 A 89, 会場 B 85, 計 174, 出席者数約 360 名, 各セッションの座長は次の方々をお願いした。

	会場 A	会場 B
13 日 午前	横山 紘一, 若生康二郎,	杉本大一郎, 小田 稔,
午後	安田 春雄, 堀 源一郎,	加藤 正二, 藪 下 信,

14 日 午前	日江井榮二郎, 柿 沼 隆 清,	坂 下 志 郎, 高瀬文志郎,
午後	海野和三郎, 神野光男,	田中春夫, 会津 晃,
15 日 午前	上西啓祐, 山下泰正,	甲斐敬造, 高倉達雄,
午後	小暮智一, 川口市郎,	石田五郎, 北村正利,

会期中の 13 日の昼に内地留学奨学金選考委員会, 14 日夜に懇親会, 15 日の昼に理事会が開かれた。

学会だより

昭和 57 年度科学研究費補助金配分審査委員候補者

日本学術会議研究費委員会より標記の件について推薦の依頼がありましたので、本学会として評議員の書面投票により下記の方々を推薦いたしました。

第 1 段審査委員候補者: 藤本光昭, 奥田治之,
内田 豊

第 2 段審査委員候補者: 古在由秀, 海野和三郎

なお、現在の第 1 段審査委員は、加藤正二, 高窪啓弥, 小平桂一の 3 氏で、昭和 56 年度で加藤正二, 高窪啓弥の両氏が任期満了となります。又現在の第 2 段審査委員、川口市郎氏も昭和 56 年度で任期満了になります。

雑報

岡山観測・技術シンポジウム報告

光学望遠鏡計画の議論のさなか、7 月 23 日からの 3 日間、日本の光学天文観測の芽を育み支えてきた岡山天体物理観測所のある鴨方町の町民会館において、第 2 回目の岡山観測シンポジウムが 9 年振りに開催され、引き続き第 1 回目の技術シンポジウムが同じ会場で行われた。光学観測に携ってきた関係者約 70 名の参加があった。

第 1 日目ははじめに光学観測の現状の紹介 (山下), 岡山観測所の生い立ちと 22 年間の発展の記録 (石田五郎), 光学と天文学の接点その展望という補償光学・画像修正を主とした招待講演 (辻内), 望遠鏡の制御に関して (清水 実), 国内外における鏡の軽量化への足跡の紹介 (富田) があった。午後からは、本観測開始以来の

188 cm ニュートン観測の詳細な紹介 (高瀬), 岡山の天候 (石田五郎), 二次元撮像のための CCD カメラ (家), 低分散分光用のグリズム分光器 (高田), 光ファイバーの応用 (小平) などの講演に始まり、カセグレン焦点の観測では I.I. 分光器を用いた観測 (若松), ポラリメータを含んだ多チャンネル分光計 (沖田), 91 cm 望遠鏡における UVB 測光とスキヤナの観測 (近藤), ISIT を用いた天体撮像とそのビデオの公開 (磯部), があり、瀬戸内の風で蒸し暑い午後 7 時まで講演が続いた。

2 日目は、IDARSS の分光観測への応用についての岡山の実験 (渡辺), 東北大の観測と実験 (田村, 石井), 銀河観測用新分光器の設計 (岡村, 清水実) があり、クーデ焦点での分光観測の推移 (山崎), 高分解能高効率化の提言 (定金), 世界に先駆けた高分散エッジル分光の現状 (辻), フーリエ分光器による赤外観測 (田中), クーデ分光器用リチャードソン型イメージスライサー (山下), ステラー・マグネットグラフ計画 (成相), スペックルとファブリ・ペロー干渉計の紹介 (安藤) が行われた。

各種センサーの冷却システムの確立, 新検出器の応用, クーデ室拡大による高分散分光の充実, 広がった天体用のカセ新分光測光器, 蓄積型モニター及び TV ガイダーなど多くの機器開発が望まれるとの総括 (家) をもとに討論が行われて終了した。

引き続き技術シンポジウムにおいては、技術者のための天文学解説と観測天文学の展望について、世界の望遠鏡 (磯部), 望遠鏡の技術的諸問題 (清水実), 銀河の光学観測 (家), 星の観測 (安藤), 写真測光と画像処理 (岡村) の特別講演が行われた。

3 日目は観測機器開発を行っている現状を、堂平観測所多色偏光装置の TV ガイダー (山口), 岡山で計画